8. 慢性血液透析患者の予後追跡調査成績

内科学（循環器）
赤芝　聖，石光俊彦，高橋利明，亀田智子，
太田　智，吉井正義，南　順一，小野英彦，
松岡博昭

【目的】慢性血液透析患者の生命予後に影響を及ぼす因子を，5年間の追跡調査により検討した．

【方法】1998年1月に安定した慢性血液透析患者556例を登録し，2003年1月まで5年間の追跡調査を行った．

【結果】5年間で3例が移植を受け174例が死亡した．死因のうち86例は心血管疾患（脳卒中27，心筋梗塞20，心不全16，不整脈および突然死17，他の血管疾患6），88例は非心血管疾患（感染症41，悪性腫瘍17，消化管出血6，肝不全9，呼吸不全4，DIC 3，事故および自殺8）であった．背景因子，身体所見の中で，男性，高年齢，糖尿病，心血管疾患の既存，脈圧高値，透析間の体重増加が少ないこと，検査所見の中ではCTR高値，左室肥大や不整脈などの心電図異常，肝機能異常そして血清アルブミン，BUN，クレアチニン，Na，K，Ca，リンの低値などが生命予後の不良と強く関係する因子であった．ヘマトクリット値（Ht）により5群に分けると，死亡率は最低群（43.2％）と最高群（36.9％）で中間3群（26.0％）に比べ高かった（$p = 0.009$）．中間3群に比べ最低群では不整脈・突然死（6.3 vs 1.8％，$p = 0.014$），感染症（12.6 vs 4.8％，$p = 0.004$）および悪性腫瘍（6.3 vs 1.8％，$p = 0.014$）による死亡が多く，最高群では心筋梗塞（7.2 vs 3.6％，$p = 0.046$）および感染症（9.9 vs 4.8％，$p = 0.013$）による死亡が多かった．

【結論】慢性血液透析患者の生命予後には，性別，年齢，糖尿病や心血管疾患の合併などの危険因子に加え，食事摂取や運動能などの活動性が保たれていることが重要であり，Htの目標値は30％程度が妥当であると思われた．

9. 進行大腸癌において垂直浸潤距離はDukes C を再評価できる

病理学（人体分子）
勝又大輔，小野祐子，市川一仁，冨田茂樹，
藤盛孝博
第一外科学
勝又大輔，藤田昌紀，渡辺　理，椿　昌裕，
砂川正勝

【目的】固有筋層を越えた進行大腸癌の浸潤距離を計測し，5年生存率との関連について検討することによって，その病理学的意義を明らかにすること．

【対象・方法】1990 ～ 2000年に外科的切除された大腸癌症例計238例（根治度A）のうち，他病死・多重癌例を除いた進行大腸癌147例（結腸癌108例，直腸癌39例）．各症例の最深部を含むパラフィンブロックを選別し，固有筋層を超えた浸潤距離を測定する目的でElastica Masson染色標本を作成した．計測には大腸癌研究会に準じた測定法を用いた．

【結果】大腸癌全体（colon + rectum）では，6 mm以上の浸潤で生存率が低下する傾向を示した．進行直腸癌においては，T3/T4よりも固有筋層を超えた距離を測定した分類の方が有意に予後と相関した．Dukes C 症例のうち，4mmを超えたものは5生率0％であった．

【考察】固有筋層を越えた浸潤距離は，簡便に評価できる病理学的因子のひとつである．従来用いられている Dukes 分類 C の中から，特に予後の悪い群を選別することができた．他の臨床病理学的事項（リンパ節転移の有無など）とあわせて検討することにより，有用な予後因子となる可能性が考えられた．